

武藏野日曜集会

活水
——ヨハネ伝第7章25～44節——

小池辰雄

1994年11月13日

生命の言 平伏し キリスト・イエスにある神の愛 真の者あり 肉なる我と靈なる我 腹よ
り活ける水 十字架・聖霊の人 聖霊の力と智慧

【ヨハネ7・25～44】

²⁵爰にエルサレムの或る人々いう『これは人々の殺さんとする者ならずや。
²⁶視よ、公然に語るに之に対して何をも言う者なし、司^{つかさ}たちは此の人のキリストたるを真に認めしならんか。²⁷然れど我らは此の人の何處よりかを知る、キリストの来る時には、その何處よりかを知る者なし』²⁸爰にイエス宮にて教えつつ呼わりて言い給う『なんじら我を知り、亦わが何處よりかを知る。されど我は己より来るにあらず、眞の者ありて我を遣し給えり。汝らは彼を知らず、²⁹我は彼を知る。我は彼より出で、彼は我を遣し給いしに因りてなり』³⁰爰に人々イエスを捕えんと謀りたれど、彼の時いまだ到らぬ故に手出する者なかりき。³¹斯^{かく}て群衆のうち多くの人々イエスを信じて『キリスト来るとも、此の人の行いしより多く徴を行わんや』と言う。³²イエスにつきて群衆のかく囁くことパリサイ人の耳に入りたれば、祭司長・パリサイ人ら彼を捕えんとて下役どもを遣ししに、³³イエス言い給う『我なお暫く汝らと偕に居り、而してのち我を遣し給いし者の御許^{みもと}に往く。³⁴汝ら我を尋ねん、されど逢わざるべし、汝等わが居る処に往くこと能わず』³⁵爰にユダヤ人ら互に言う『この人われらの逢い得ぬいづこに往かんとするか、ギリシャ人のうちに散りおる者に往きてギリシャ人を教えんとするか。³⁶その言に「なんじら我を尋ねん、然れど逢わざるべし、汝ら我がおる処に往くこと能わず」と云えるは何ぞや』³⁷祭の終の大なる日にイエス立ちて呼わりて言いたもう『人もし渴かば我に來りて飲め。³⁸我を信する者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』³⁹これは彼を信する者の受けんとする聖霊を指して言い給いしなり。イエス未だ榮光を受け給わざれば、御靈^{くだ}いまだ降らざりしなり。⁴⁰此等の言をききて群衆のうちの或人は『これ眞にかの預言者なり』といい、⁴¹或人は『これキリストなり』と言い、又ある人は『キリスト争^{いか}で



●生命の言

「先生、元気な秘訣は何ですか」と聞かれると、私は、

「秘訣も何もありはしない。ただ、はつきり言うと、私の力は天界からきているんだ」と答える。正直、靈界から力をいただいているような人はあまりいない。クリスチヤンなんていっても、觀念的なものが多い。

「聖書の研究で聖書が分かるか、天來の光で読め」と言うわけです。聖書は生命の言葉であつて、意味ではない。

「わが言は靈なり、生命なり」

とキリストが言われた。これはキリスト自身の御言ですから。キリストが言葉を発すると、靈なる生命なる言葉自身が靈的な波動になつて、相手の人が救われていく、力を得ていく。キリストはいわゆるお説教なんかしてない。生命の言を与えておられた。我々も聖書は、生命の言を食らう。聖書の文字を食らうように読まないと、本当は讀んでいることにならない。それで聖書は楽しいわけです。

昔が單に昔でなくて、いつも現在してくる。本当の生き方というものは、過去を現在化して、未来をまた現在に引き寄せる。そういう永遠的な質をもつた現在を生きていないと、本当は生きているということにならない。

「神のうちに生き動きまた在るなり」

とは、パウロの好きな言葉です。これはゲーテも非常に好きで、彼の詩の中にも出てきます。私たちは、

「キリストの中に生き動きまた在るなり」

ということです。人間ですから、躊躇したり転んだりいろいろなことがありますけれども、しかし、根底においては「キリストの中で生き動きまた在るなり」ということです。本当に平伏していると、その世界に入れられる。傲慢な魂はダメです。平伏しの魂です。

●平伏し

私が無というのは、姿でいうと「平伏し」のことです。これは私が無い無私ということ。

無私の最大のものはイエス・キリストです。キリスト自身が私の無いひとです。

「我れ何ごとも為し能わず。わが言葉はわが言葉にあらず」

ガリラヤより出でんや、⁴² 聖書にキリストはダビデの裔すえまたダビデの居りし村ベツレヘムより出づと云えるならずや』と言う。⁴³ 斯くイエスの事によりて、群衆のうちに紛争あらそいおこりたり。⁴⁴ その中には、イエスを捕えんと欲する者もありしが、手出する者なかりき。



「父がさせているだけだ。父が言わせている。主なる神がさせている。神さまが言わせている」

と、キリストは自分をゼロにしている。そういう無私の無です。虚無ではない。「私が無い」というと、「神が有る」ことだ。神が降りてくる。私たちは自分で無私にはなれない。キリストの十字架の贖罪で無私にされている。キリストから無私という現実をいただいている、賜つているわけです。賜りたる現実です。だから、祈りのときは平伏して祈る。そうすると、我々にはキリストがやつてくる。

この平伏しの姿には、キリストは、過去・現在・未来のその人の相対的な在り方なんて問題にしないで、捕まえてくださる。ありがたいことです。これは絶対恩寵という、無条件な恵みの世界です。

「信仰、信仰」

と言つて、自分の信仰をサムシングにして、

「信仰が大事である」

なんて、信仰ということを非常に問題にしている。信仰がサムシングになつていて。信仰を私したらダメなんです。そんな信仰はくたびれてしまう。私は、

「信仰も何もありません。上からの恵みの力だけです」

と言う。聖靈の世界になると、上からくるこの恵みの力を受けとる、こういう角度です。太陽の光を受けとる。こつちから光を放つてているのではない。こつちから何か靈的な光を放とうとしたら、くたびれてしまう。受けとるばかりです。そうすると、それがやつてきて、それが私たち一人ひとりの中で燃えだす。泉として湧きいでる。また、火として燃えだす。

聖靈は水に例えられたり火に例えられたりする。

「我れ火を投ぜんために来たれり」

とは、聖靈の火のことです。今日のところは水、活ける水だ。活ける水が腹から湧き出でる。我々は聖靈を水と自覚したり、火と自覚したりする。「水火相容れず」ではなくて、「水火どちらでも結構だ」というわけです。これは聖靈の世界です。

「これは聖靈について言つた」

と、今日のところにも書いてある、

「御靈いまだ降らざりしなり」

と。ペンテコステがくるまでは聖靈は臨まなかつた。キリストはもちろん聖靈を内住している方ですけれども、使徒たちはみなペンテコステが来てやつと聖靈をいただいた。パウロはダマスコ途上でひつくり返されて聖靈を受けた。聖靈が来るまではキリスト者ではない。



●キリスト・イエスにある神の愛

ローマ書8章にそのことが書いてある。ローマ書8章というのは大事なところです。内村先生は、

「ローマ書8章はダイヤモンドみたいな所だ」と言つた。

「⁹然れど神の御靈なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで靈に居る。」

「肉」とは生まれつきの我のことです。「に居る」という言い方はその中に住んでいる、生きているということ。

キリストの御靈なき者はキリストに属する者にあらず。

とはつきり書いてある。「キリストの御靈」ですよ。私たちはキリストを通らなければ御靈は来ない。いきなり「神の御靈」というわけにはいかない。

¹⁰若しキリスト汝らに在まさば体は罪によりて死にたる者なれど靈は義によりて生命に在らん。

「魂にいただいている靈は義によりて生命にある」

ということ。キリストが与えたもうところの恵みは義ということ。

「義人なし一人だなし」

というのは、キリストの義は誰も持つていない。これは賜る義である。義も愛も結局同じことです。聖靈の角度が義で、十字架の角度が愛です。生命を棄てて、また生命を与える。生命を棄てる方が十字架で、生命を与える方は聖靈の方です。キリストは両方なさつたわけで、これは離すことができない。

¹¹若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御靈なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御靈によりて汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。」（ロマ8・9～11）

「キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし神さまは、汝らの中に宿りたもう御靈によりて汝らの死ぬべき体をも活かし給う。」

と素晴らしいことが書いてある。ローマ書8章というのは本当にダイヤモンドみたいな大変な所です。8章の終りの方は素晴らしい讃美歌みたいだ。³⁷節に、

「³⁷然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者

キリストです。

に頼り、勝ち得て余あり。³⁸われ確く信ず、死も生命も、御使も、權威ある者も、今ある者も後あらん者も、

一切の相対的なものということ、

力ある者も、この世の權力者です、



³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、
これはみな相対的な世界です。

我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」（ロマ8・37～39）

「キリストにおけるところの神の愛」というのは大変なものです。パウロというのはやはり凄い。こういう言葉がローマ書8章に出ていて、26節も大事なところです。

「²⁶斯くのごとく御靈も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御靈みずから言い難き嘆きをもて

「嘆き」ではなくて呻きです。「嘆き」と訳しているのは間違えです。

執成し給う。²⁷また人の心を極めたもう者は御靈の念^{おもい}をも知りたもう。御靈は神の御意に適^{かな}いて聖徒のために執成し給えばなり。」（ロマ8・26～27）

本当の本願の祈りがそれでできるわけです。ローマ書8章というのは凄い所です、時々お読みになるといい。ローマ書8章全体は福音そのものを集約してある大変なところです。

私が今書いている詩は究極においてもちろんキリストを讃美する詩です。お釈迦さんがどうであろうと、イエス・キリストはケタがちがう。大変なひとです。地上は32、33歳で十字架に架かつてサヨナラしてしまつたけれども。こういうひとがいるかという。私は感激してしまつていてるのだから言葉が出ない。

● 真の者あり

では、ヨハネ伝に入ります。7章25節から、

²⁵爰にエルサレムの或る人々いう

これはエルサレムに常住している人間だな。

『これは人々の殺さんとする者ならずや。

キリストのことです。

²⁶視よ、公然に語るに之に対して何をも言う者なし、
キリストは恐れるものがないから、そんなことに一向平氣で彼は語つていてる。

司^{つかさ}たちは此の人のキリストたるを真に認めしならんか。

「司たち」とは衆議所サンヘドリンの人間です。まさかそんなことはなかろうと。

「何處よりか」とは、地上の相対的な意味の「何處」です。ナザレに生まれたキリストのこと。何も本当は知つていない。

キリストの来る時には、その何處よりかを知る者なし²⁸ 爰にイエス宮にて

教えつつ呼^{よば}わりて言い給う

キリストは大きな声で言つていたらしいね。



『なんじら我を知り、亦わが何処よりかを知る。されど我は已より来るにあらず、

「君たちの知るというのは、肉なるこの世的な相対的な現実の自分のことを知っているのであつて、本当は分かつていないと」ということです。

「**真の者**ありて我を遣し給えり。

「**真の者**」とはギリシャ語で「アレーティノス」という。神さまのことです。おもしろいね、神さまのことを「聖き者」とか「**真の者**」とかいう。本ものということ。神さまだけが本ものだということです。

「本来は私は天界で神さまと一緒にいたんだ。それが地上に現れたんだ」というわけです。

汝らは彼を知らず、

「**彼**」とは神さまのこと。キリストは神さまのことを「**彼**」と言つてはいる。私たちが「**彼**」と言うときにはキリストのことになる。

「彼はわが導きびとなり。彼はわが友なり」

とか言う。固有名詞的な「**彼**」というのは我々クリスチヤンにとつては「キリスト」のことです。それは三人称的な言い方ですが、一人称になつたら「あなた」という。祈るときには「あなたは」と言う。

²⁹我は彼を知る。我は彼より出で、彼は我を遣し給いしに因りてなり

こういうことがはつきり言える人だから、大変なものだ。だから、神の子です。旧新約聖書の中心はキリストです。著者は神だけれども、中心の中心はキリスト、中心の主人公はキリストです。旧約はキリストの預言。新約はキリストの証です。

●肉なる我と靈なる我

私たちは誕生を二つもつてゐる。私たちがお母さんのお胎^{なか}から出てきた時は、肉の誕生です。十字架・聖靈にぶつかつて、キリストに新しく生まれ変わらせていただいた「第一の我」というのは「靈なる我」です。我々は二重人格なんだ。「肉なる我」と「靈なる我」と二つある。靈なる我を本当にもつてゐる人は少ない。クリスチヤンでも觀念的なのはダメです、本当に「御靈の我」でなければ。

「聖靈、聖靈」

と言つたつて、「十字架」が土台になつていなければダメです。十字架で救われて、聖靈が来たのだから。ペントコステです。使徒たちもそうだから。聖靈が来て初めて、使徒たちは十字架の何たるかが分かつた。パウロがやはりそうなんだ。聖靈でひつくり返されて、後から十字架が分かつた。だから、パウロは、

「自分は十字架の他は何も言うまいと思う」



と言つてゐる。十字架が土台だという。「キリスト教」といえば、十字架になつてしまつてゐるからね。ところが、普通のクリスチヤンは十字架ばかりで、聖靈がない。十字架と聖靈の両方がなくてはダメです。

30 爰に人々イエスを捕えんと謀りたれど、彼の時いまだ到らぬ故に手出する

者なかりき。

キリストから言わせると、彼が捕まえられる「時」です。彼の方は十字架のことを自覚していますから。

31 斯て群衆のうち多くの人々イエスを信じて『キリスト來るとも、此の人の

行いしより多く徵を行わんや』と言う。

「誰が他にそんなことができるか。これは大変な人だ、ケタが違うんだ。こんな凄いことを言つたり、したりする人は他には考えられない。だからこれはキリストだと。

「ラザロよ、出よ！」

とか、死人を甦らせたり、棺桶に手をおいたら死人が甦つて出てきたりした。

我々の、キリストの前にある姿は平伏しです。その他の何ものでもない。サタンは靈的傲慢者。キリスト者は靈的な平伏しの人です。

32 イエスにつきて群衆のかく囁くこと。パリサイ人の耳に入りたれば、祭司長・パリサイ人ら彼を捕えんとて下役どもを遣ししに、33 イエス言い給う『我なお暫く汝らと偕に居り、而してのち我を遣し給いし者の御許に往く。34 汝ら我を尋ねん、されど逢わざるべし、汝等わが居る処に往くこと能わず』35 爰にユダヤ人ら互に言う『この人われらの逢い得ぬいすこに往かんとするか、ギリシヤ人のうちに散りおる者に往きてギリシヤ人を教えんとするか。36 その言に「なんじら我を尋ねん、然れど逢わざるべし、汝ら我がおる処に往くこと能わず』と云えるは何ぞや』

どういうことかもちろん分からぬ。

「私は神さまの所へ行くが、お前たちは神さまの所へいきなり行けるか」というわけです。問答していくも、次元がちがうものだから、どうにもならん。

●腹より活ける水

37 祭の終の大なる日にイエス立ちて呼^{よば}わりて言いたもう『人もし渴かば我に來りて飲め。38 我を信する者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』39 これは彼を信する者の受けんとする聖靈を指して言い給いしなり。イエス未だ榮光を受け給わざれば、御靈いまだ降^{くだ}らざりしなり。



「栄光を受ける」というのは昇天のことです。「御靈^{まこと}まだ降^{くだ}らざりしなり」とは、「人々には御靈^{くわ}が降^{くだ}つてない」ということです。

「かの預言者」とはエレミヤのことです。

⁴⁰此等の言をききて群衆のうちの或人は『これ真にかの預言者なり』といい、⁴¹或人は『これキリストなり』と言い、又ある人は『キリスト争^{いか}ガリラヤより出でんや、⁴²聖書にキリストはダビデの裔またダビデの居りし村ベツレヘムより出づと云えるならずや』と言う。⁴³斯くイエスの事によりて、群衆のうちに紛争^{あらそい}おこりたり。⁴⁴その中には、イエスを捕えんと欲する者も有りしが、手出する者なかりき。

まあ、いろいろなことを言われるわけだ。

「人もし渴かば我に來りて飲め。我を信する者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし」

とある。これは詩篇42篇に、

「ああ神よ、しかの^{たにがわ}溪川をしたい喘^{あえ}ぐがごとく、わが靈魂もなんじをしたいあえぐなり。わがたましいは渴けるごとくに神をしたう。」（詩篇42・1～2）とある。また、出エジプト記17章には、モーセが杖で磐を擊つたら磐から水が出たとある。

「視よ我^{ああ}そこにて汝の前にあたりてホレブの^{いわ}磐の上に立たん。汝磐を擊つべし、然せば其より水出でん。民これを飲むべし。モーセすなわちイスラエルの長老等の前にてかくおこなえり。」（出エジプト17・6）

また、「水」についてはイザヤ書にも、

「われ渴けるものに水をそそぎ、乾^{かわ}たる地に流れをそそぎ、わが靈をなんじの子輩^{こら}にそそぎ、わが恩恵^{めぐみ}をなんじの裔^{すえ}にあたうべければなり。」（イザヤ44・3）
「噫^{ああ}なんじら渴ける者ごとく水にきたれ、金なき者もきたるべし。汝等^{汝等}たりてかい求めてくらえ。きたれ金なく価なくして葡萄酒と乳とをかえ。」（イザヤ55・1）

「エホバは常になんじをみちびき、乾^{かわ}けるごろにても汝のこころを満足^{みちたら}しめ、なんじの骨をかたうし給わん。なんじは潤^{うるお}いたる園のごとく水のたえざる泉のごとくなるべし。」（イザヤ58・11）とある。

● 十字架・聖靈の人

聖靈は「活ける水」「活水」であるし、また、諸々の悪いものを焼きつくす火である。水になつたり、火になつたりする。



「我は火を投ぜんために来れり」

というキリストの言葉がルカ伝12章にあるが、あれは聖靈の火のことです。ここは水だ。両方とも聖靈のことです。聖靈の水、聖靈の火です。

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたんには、我また何をか望まん。

聖靈の火が燃えたら、それが自分の目的だという。

されど我には受くべきバプテスマあり。

十字架のことです。

その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。われ地に平和を与えんために来ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。」（ルカ12・49～51）

本当の真理は却つてこの世的な考えとは合わないから、そこで紛争が起きる。

とにかく、聖書は繰り返し読まないとね。本も第一流のもの——聖書は特別の特流のものだけれども——第一流のものしか読まなくて、他のものを読む必要はない。ダンテの『神曲』とか、ゲーテの『ファウスト』、ユゴーの『レ・ミゼラブル』とか、トルストイの『復活』、ドストエフスキイの『カラマーゾフの兄弟』とか。スペインのドンキホーテの本も面白い。『ファウスト』は非常に福音的であるわけではないけれども、ゲーテというひともなかなか聖書を愛読した人だから、その中にメタモルフォーゼをして変形して出ている。

要するに、新約聖書を読んで、その言葉の背後にあるキリスト、聖靈、これを身体で受けとるような読み方をしないと、聖書を読んだってつまらんです。身体で受けとるんですよ、頭ではない。身体で全存在で受けとる。そうすると、身体が熱くなる。力がくる、光がくる、生命がくる。私の生命力の根源はそういう事態です。それだから元気なんだ。正に靈氣の世界です。藤田東湖が

「天地正大の氣」

と言つた、そういう靈氣です。

人がものを言つている時に、

「この人は本当に聖靈の人だ」

とか、

「いやどうもまだ本当の意味で聖靈が生きていないな

とか、これは語つていて分かる。だから、どうぞ皆さんは、十字架・聖靈の人として、

「私の中心は十字架と聖靈です」

とはつきり言えないとね。

「聖書のどこだ、ここだ」



なんて、そういうことではない。

●聖靈の力と智慧

旧約聖書の中心は何といつてもイザヤ書です。詩篇ではない。イザヤ書は大変なところです。これは全聖書の縮図みたいなところだ。これは三入くらいで書いている。第一イザヤが1章から39章まで、第二イザヤは40章から55章まで、56章から66章が第三イザヤです。大変な本だ、読んでいて驚嘆する。

「参りました！」

と、降参して読む。降参して読むとは本当にそうなんです、

「分かる、分からぬ」

ではない。「参りました」と言つて読むときに、本当にその内容が入つてくる。頭で「分かる、分からぬ」なんて言つている人は、いつまでたつてもダメです。

パウロもキリストに降参した。それだから、凄いことになつた。パウロもペテロもヨハネもそうだ。ヨハネは割合にスープと入つていつた人だ。ペテロは波型なんだ。パウロは電光石火型だ。人間にはいろいろな型があるから、どれがいいの悪いのではない。人によつていろいろな型がある。

今日は、我々はこの活ける水になつたわけだ。活水になつた。泉のとき人間です。キリストの泉が湧いている。池ではない。泉でなければ。

いろいろなものが海の中に流れに入るけれども、海そのものは塩でもつてそれを全部、浄化してしまう。海というものは素晴らしいね。塩というのは浄化作用がある。どうして海にはあんなに塩分があるのかね。塩がないとダメなんだ。人間も塩辛いものをもつてないとダメだ。味をつけるときには塩で味をつける。砂糖で味をつけたものはダメなんだ。

あなた方、相撲を時々見ているかい。相撲も取りかたのコツがある。私は親方になつてやりたいくらいだ、

「ダメだぞ、あんなのは」

なんて言つてね。力ばかりではないんだ、コツがある。何を見ていても、聖靈の智慧で見ていると、本ものが分かる。何事をするのにも、聖靈というものが、もの凄いいろいろな角度の力を、内容をもつてている。聖靈というものは内容の豊かなものです。私が詩を書いているのもみなこの聖靈の力と智慧です。

